

視点(978)

2008年度の日本人のノーベル賞受賞内容から見る

流通を科学する手法との関係は(その2)!!

(流通とSC・私の視点977より続く)

③成果は紙一重で決定されるという“天国と地獄”手法

粒子と反粒子(質量が粒子と同じで電極が反対)が全く同じだと、粒子と反粒子が反応して光となって消えます。これでは宇宙は光だけになり、そのほかの物質は存在しなくなります。宇宙誕生時には粒子と反粒子は同数あったが、現在、粒子のみが残って宇宙を形成しています。これは「対称性の破れ」という現象がビッグバンで起こり、本来は同一の粒子と反粒子が光となって消えなかったのは、「ほんのわずかな違い(百億個に一個以上の割合)が発生した」からです。このほんのわずかな違いが素粒子を光とならずに残し、今日の宇宙を形成している物質(分子、原子、陽子、クォーク)を存在させたのです。野球理論の紙一重の理論や天国と地獄の理論として、「2割5分バッターは125本のヒットを打ちながら年俸は2,000万~4,000万円となります。もう25本打てば3割バッターとなり年俸は1億~2億円と5倍に、もう25本打って3割5分バッターとなれば年俸は5億~10億円ですさらに5倍となります。ほんのわずかの差が大きな結果の差となるという理論」があります。仮に、宇宙のビッグバンで粒子と反粒子にほんのわずかな異質性(破れ)がなければ、あらゆる物質は存在せず、我々が見たり考えたりしている宇宙は存在しません。微差が超差となる「コロンブスの卵理論」と同じです。

(2) 化学のノーベル賞受賞内容(下村氏)

下村氏のノーベル賞受賞の内容は、物理学の南部、小林、益川氏の時と比べて我々に非常に理解できます。下村氏はオワンクラゲから取り出したGFP(緑色蛍光タンパク質)に紫外線を当てると緑色に輝くことを発見しました。下村氏のGFPの発見に基づき、同時にノーベル賞を受賞したマーティン・チャルフィー氏とロジャー・チェン氏がGFPとその遺伝子を生きた細胞の中で特定の遺伝子やタンパク質の動きを追う「標識」として使う技術を開発しました。「GFPの発見と開発」が3氏の受賞理由です。

この化学分野で、偉大なる成果でノーベル賞を受賞した内容の中に、成果を追求することに役に立つことが2つありました。

①事例研究から学ぶ応用技術の適用手法

下村氏の成果は、病気の治療技術や遺伝子のメカニズムの発見を飛躍的に高めたことですが、オワンクラゲがGFPにより光ることは全く関係のないことです。しかし、オワンクラゲの光るメカニズムとGFPを取り出した行為は、その時点では全く成果としては未知数でした。しかし、医学や生物学の分野に応用することにより、その技術は大きく評価されました。

流通業界の中に「ストアコンパリゾン」(他の店を見て売れているメカニズムを探索する手法)や「バージョンテクニク」(直接関係はないが伸びている企業や業種のコンセプトを探索する手法)があります。また、宇宙のメカニズム、人体のメカニズム、動植物の生態や行動メカニズムから、企業や業態のあり方や成功パターンを学ぶ手法もあります。人間社会で起こる出来事は、マクロの分野やミクロの分野と見た目は異なりますが、メカニズムが同一の場合が非常にたくさんあります。異業種の成功パターンの導入や、異なる分野の現象を基礎知識として学ぶことにより成功に導く手法が創出することが化学の分野も流通の分野も多くあります。

②成果分担の法則の適用手法

下村氏がGFPのメカニズム及び分類・精製にも成功したのが1962年ですが、その結果は長らく応用されませんでした。しかし、1990年代にGFPの遺伝子の特定と複製が実現し、特定の遺伝子とGFPを結びつけて、遺伝子が働いている場所や時間を簡単に特定できるようになり、生命科学の根幹技術や病気治療技術に応用されています。すなわち、基礎理論を創出した人と応用理論を創出した人は別の人で互いに役割分担で成果を出しました。

流通業界の中にも、コラボレーションやSCのデベロッパーとテナントの関係、実務家とコンサルタントの関係など、いろいろな分野で異なるノウハウの一体化が行われています。化学分野の基礎科学(理論)と応用科学(戦略)と実施科学(戦略)も、1つの事象を成し遂げていく場合の成果を高くするためには、共同作業が必要です。

(株)ダイナミックマーケティング社^{*3}
代 表 六 車 秀 之